麻薬ー溺れていく愛ー

辻　和美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
麻薬ー溺れていく愛ー

【Ｎコード】
Ｎ６９９２Ｃ

【作者名】
辻　和美

【あらすじ】
出来ちゃった婚をした高原夕子は少しずつ夫とすれ違っていく。やがて決定的な裏切りにあい夕子は夫に心を閉ざしていく。そんな彼女に旅先で落とした携帯電話が新しい出会いを運んでくる。ひび割れた土が水をいくらでも欲するかのように若宮修二との恋に堕ちていく。夕子は夫への不信感、寂しさから修二と逢う回数が増えていく。そんな時、夕子の子供、佳奈が事故に逢って・・・。

第一話　夫との始まり

彼と出逢わなければよかった・・・
なんて思える日がくるのだろうか
私を私と認めてくれる、受け止めてくれる修二
彼がいなければ
私は魂の抜け殻となり、朽ち果てていた
そんな毎日なんて考えただけでもおぞましい

以前の私なら考えもしなかった
幸せな結婚をして、子供を産んで
楽しい家庭を作りたい
人並みでささやかな幸せを望んでいた
それが今では・・・

夫とはもう半年ほど会話をしていない
子供が唯一つながりになっているような状況

私達は付き合って間もなく妊娠した
そして結婚した
妊娠はきっかけにすぎなかった
出来ちゃった婚ではあったが
お互いにずっと一緒にいたい気持ちは同じだった
ただ今にして考えてみると
責任感から結婚に踏み切った感じもないこともない
もちろん、そんなことは今になってから思うことであり
その時の二人には想像もできなかった

挙式は二人だけで

オーストラリアにて行った
夫はたいしてこだわりもなかったからか
海外での挙式に賛成してくれた
ごくシンプルな結婚式だった
とても素敵な結婚式だった
海が輝いていて
開放的で
二人さえ一緒にいれば
何が来ようと乗り越えられる・・・そう思っていた
あの頃が一番幸せだったのかもしれない
周囲から見れば現在だって
充分すぎるほど幸福だと思う
夫は大手企業勤め、賢くて優しい娘
恵まれすぎていた
だからといって裕福であれば
心が満たされるというのはまた別の話だ

第二話　夫とのすれ違い

時が経つほどに自分が自分でなくなってゆく
どこかに自分を置き去りにしてきたかのような
空っぽの自分がいた
夫は仕事が趣味というような
もっぱら仕事人間だ
新婚旅行が唯一とってくれた休みだろうか
そんな夫を頼もしく思っていた
結婚してすぐに産まれた佳奈はもう五歳になったとてもかわいい
目に入れても痛くないとは本当だった
いたずらをしても笑えてしまう
この子がいてくれて本当によかった
夫も佳奈にはさからえない
佳奈はいつもパパにいう『早く帰って来てね』
その約束は果たされていない。
朝は佳奈が寝ているうちに出勤し、夜は寝てから帰ってくる
ほとんど母子家庭だ
それでも佳奈は今日はきっと早く帰ってくる、そう思っている
私はとうに諦めた
というか、この生活に　すっかり馴染んでしまっていた。最初のころは佳奈も赤ちゃんで大変だった
初めての育児
それも結婚する予定もなくハプニングで産まれたような佳奈
かわいらしさと同時にとまどいも多かった
夫は仕事が忙しく休みの日には佳奈の世話も少しはしてくれたが
初めて佳奈が熱を出した日…
夫はいなかった
初めて佳奈が寝返りした日…

夫はいなかった
初めて佳奈がおすわりした日…
夫はいなかった
初めて佳奈がハイハイした日…
夫はいなかった
初めて佳奈がたっちした日…
夫はいなかった
初めて佳奈が歩いた日…夫はいなかった
私は次第に夫との距離ができていた
少しずつ何かが違ってきていた

第二話　夫とのすれ違い（後書き）

よかったら評価を書いていただけたら幸いです

第三話　孤独との日々

二人で過ごしていてもまるで一人でいるような孤独感
付き合っていたころの心地よさはすっかり消えていた
夫には私に対する愛なんて、もうすでになくなっているのだろうか
仕事が大変なのはよくわかる
でも一日中家にいる私は社会から見放されたような
友達からも忘れられてしまったような気がした
そう、まるでどこか知らないところに
佳奈と二人放り出されたかのように
周りが遠くに感じられた
そんな中で私は佳奈と一緒に楽しむことを考えた
しかし先は長い
夫がいまさら仕事人間からかわるわけはない
私はこのまま歳を取って人生を終えるのだろうか
佳奈がもう少し大きくなれば
私のこんな気持ちも変わっていくのだろうか私はもやもやする気持ちを押し込めた
そしてうちの掃除を始めた
私が大掃除をするのは決まってこういう時だ
悩んだとき沈んだとき部屋の掃除をすると気持ちがすっきりする
部屋のほこりが心の中のもやもや感に似ているから
さあ佳奈を迎えにいってこよう
私は佳奈を幼稚園に迎えにいった
毎日が同じ事の繰り返しだった。
退屈な日々だった
友達と話していても心の中は孤独だった
幼稚園が夏休みになったさらに時間は余ってくる

そうそう子どもを連れてお出かけばかりもできない
私はしばらく実家に帰ることにした
夫も私と顔を合わせば喧嘩、小言の毎日に疲れていたのか
大賛成で送り出してくれた
これでしばらくはのんびり私の時間もできる…

第四話　里帰り

私は車を走らせて実家へ向かった
久しぶりのドライブは気持ちがよかった
もやもやも吹き飛んでいく
となりで佳奈も大喜びだ
私はこれから訪れる悪夢をまだわからぬまま
実家でののんびりした生活を楽しみにしていた
うちから実家までは４時間ほどかかる
実家では父と母が待ちわびていた
実家につくなり私はごろんと畳の上に寝転がった
久しぶりの実家
なんにも変わっていない母に二週間ほど世話になるねと話すと
いくらでも寝ていきな～といってくれた
これでしばらくは育児から解放される
この時間を休養期間だと思って
無駄なく利用しよう…そう思った
佳奈は早速父、おじいちゃんと川へ水遊びにいってしまった
私はその間眠っていた
起きたときにはすでに日は落ちていた
母が夕飯の支度を済ませてくれていた
大分疲れとるんねえ？大丈夫かいな？
母は心配そうに聞いてきた
大丈夫よと私は言った
ありきたりのおかずがとても美味しい
気持ちにゆとりがもてる分佳奈にも優しく接することができた
佳奈も嬉しそうだった
うちの田舎は夏でもクーラーはつけない
夜は扇風機もいらないくらいだ

夜風が気持ちよく吹いてくる
自然の風に吹かれて眠るから体調にもいい
明かりを消すと真っ暗だ
真っ暗といっても都会の暗さは真っ暗にはならないが
田舎は本当に真っ暗闇だ静かに虫の歌声を聞きながらぐっすりと眠った
翌朝は六時前から自然と目が覚めた
蝉の泣き声がすごい
今を生きようと、必死に鳴いていた
私はそんな蝉の泣き声を聞きながら自分はこんなふうに一生懸命生きているのだろうか…
私は人生を諦めている
もう一度夫と寄り添い生きていくことはできないだろうか
私は田舎に帰ってきたことで気持ちもリセットすることができた
やはり人間も動物なんだ
都会の中でコンクリートに囲まれて機会だらけのなかで生活していると
ストレスの塊と化し大切なものを見失ってしまうのかもしれない
自然が豊かなところにいるだけで、こんな風に前向きな気持ちになれる
自然には物凄く力があるのだろう
私は一週間ほど実家で過ごしている間に
明らかに自分の気持ちが変化していることに気付かずにはいられなかった

第五話　悪夢

私はもう一週間田舎にいる予定だったが
夫と話し合い離れていた溝を少しずつでもいいから埋めていきたい
新婚とまで行かなくてもお互いを想いあえる仲でいたい
そう思い、明日佳奈を連れてうちへ帰ることにした
夕御飯に間に合うように昼ご飯を食べてすぐに実家をでた
佳奈もパパに会いたいというので、すぐ車に乗った
夕方に着く予定だったが高速が渋滞している
夕飯には間に合わないかもしれない
佳奈はパパの顔をみたいらしく、必死に眠気を我慢して隣に乗っている
もう少し早く出ればよかったと後悔したが今となっては仕方ない
のろのろと動く車の列につながっていた。ようやく高速をおりてうちへつくころには8時を過ぎていた
佳奈はぎりぎりまで頑張っていたがもう寝てしまった
夫はまだ帰って来てはいないだろう
うちにはガレージがなく、近くの駐車場を借りていてそこに車をとめた
歩いても1、2分
荷物は明日運ぶことにして私は佳奈を抱き上げた

そして車をあとにした。夜でも蒸し暑いな
佳奈を抱っこして歩くと汗がふきでる
ようやくうちについて鍵を開けた…
？鍵がかかっていない
夫はもう帰って来ているのだろうか？
私は玄関のドアを開けて、中に入ろうとした
瞬間うちの中から誰かがでてきた

うちの中からでてきたのは見ず知らずの女性だった
その女性の後ろには夫が立っている
しかも二人ともパジャマ姿…
私は頭の中が真っ白になった
私のうちに知らない女性がパジャマ姿で立っている
声がでない
女性は明らかに動揺していた
ドアから離れ二階へあがってゆく
私は動けずにいた
夫は私に来週帰るんじゃなかったのか？といってきた
私に帰って来て欲しくなかったのだ
私が留守の間何をしていた？
あの女はいつからうちにいた？
うちの中で何をしていた？
私は夫と本気でやり直そうと帰ってきたのに
そんな気持ちなど一気に消えた
夫に憎しみの感情しかでてこない
腹立たしかった
私が孤独に耐えながら必死に守ってきた家庭
硝子でできたうちのようにひび割れて
いつ壊れてもおかしくなかった家庭を私は必死に守っていたのだ
夫はそんな私が大切にしていた家庭をほうり投げ
完全に壊してしまった
こうなっては、もう繋ぎ合わせることなど不可能だった
壊れた破片は次々と消えていく
五年間築いてきたものが一気にこぼれて流れてゆく
私はただそれを腹立たしい気持ちで眺めるしかなかった
うちにいた女はいつ着替えたのか鞄を抱えて走り去った
夫は私にそれ以上何も言わず女を追い掛けていってしまった
それが夫の答なんだ

密会がばれて言い訳でもするのかと思ったが
私にはなんの愛情も残っていなかった
そんな夫とやり直そうとしていたなんて
なんて皮肉なんだろう
私は佳奈を抱いたまま車に戻った
うちには入りたくなかった
私の居場所はうちにはなかった
知らない女が
歩いた廊下
座った部屋
眠ったベッド
…全てが不潔に思えた
そんな場所に大切な佳奈をいれるわけにはいかなかった
私の体が拒否反応を示したのだ
車に戻った私は佳奈をそっと助手席へ寝かせた
佳奈が寝ていて本当によかった
こんなイヤな想いをするのは私だけで充分だった
私はもう一度エンジンをかけて車を走らせた
どこにいくあてもなくひたすら車を運転した
体が覚えているのだろうか
私の思考回路は麻痺しているのに、体はちゃんと車を走らせている
気付くといつのまにか高速道路を走っていた
このままどこへいこうか
私はパーキングエリアに車を留めて一休みすることにした
もう深夜になっていた
何がどうなって、こういうことになったんだろう
夫はいつから浮気していたのか…
帰りか遅かったのは本当に仕事だけだったのか
全てが疑わしくなってくる
それにしても腹が立つのは

私が留守なのをいいことにうちに女を連れ込んでいたことだった
あの場面はどう考えても言い逃れはできない
私は腹立たしい気持ちと同じくらい悲しい気持ちで車の中にいた

第六話　現実逃避

気がつくといつのまにか辺りは薄明るくなっていた
とうとう一睡もできなかった
私はまた車を走らせた
私の体は私をどこへ連れていこうとしているのかわからなかった
車を運転していると佳奈が目を覚まして
「まだ車の中？」
と驚いたように私を見た
私は夕べの出来事は一切佳奈には話すつもりはなかった
「そうなのよ。
うちに帰る前にパパから電話があってね。
お仕事でしばらくお泊りになるみたい。
佳奈にごめんねっていってたよ」
と私は嘘を話した
嘘はつきたくなかったが事実を話したところで、佳奈の理解できることではなかった
それならわざわざ本当のことをいう必要はないと私は思った
「ママ、どこにいくの？」
と目をこすりながら佳奈は聞いてきた
「そうだね～。どこかお泊りしに行こうか」
と私が言うと佳奈は
「パパがお仕事してるところに行きたい」
といった
私はなんて言ったらいいのかわからず黙っていた
「ごめんね、佳奈
ママも知らないところでお仕事してるから
今度うちに帰ったらきっとパパも帰ってくるよ」佳奈にとっては、
大好きなパパなんだ

私はすごく動揺していた
私と夫はもう一緒に暮らすことなんてできないだろう
唯一一緒に暮らせるとしたら私が一生我慢し続けるしかない
私にはそんなこと耐えられなかった
自分の気持ちを優先させるか
佳奈の気持ちを優先させるべきか
別れるなら早くしたほうがいい
佳奈も成長すれば否応なしにわかってしまう
私は車にキーを差し込んだ
すると携帯に電話がかかってきた
夫からだった
今更なんなんだ？と思ったが電話にでた
どうやら夫は私が佳奈と自殺でもやらかさないか気になって電話してきたようだった
「今どこにいる？」と聞かれ
「二、三日旅行にいってきます。」
と私は答えた
夫は安心したようだ
それだけいって電話は切れた
私は車を走らせた
車は北陸道を走っていた三時間ほど走って金沢で高速をおりた
金沢…
夫と出会う前に付き合っていた彼と遊びにきた街であった
懐かしい
彼はどうしているだろうか
ふとそんな疑問が頭の中をよぎった
彼とは三年くらい付き合っていた
こんな真面目な人はいないっていうくらい真面目な人だった
優しくて、誠実で私はいつもありのままの自分をだせていた
彼もそんな私を好きでいてくれて

ゆくゆくは結婚するだろうと思っていた
しかし私にはその優しすぎるところが頼りなく思えてきてしまい
今の夫が当時は力強くみえて乗り換えてしまった
あんな優しい彼を苦しめてしまった
ばちが当たったのだ
あのまま彼と結婚していれば、こんな風に孤独に陥ることもなかった
悲しい思いもなかった
寂しい思いもなかった
ずっとずっと愛に満ちた生活をしていたに違いない
でも佳奈は産まれてこなかったかもしれないと思うと複雑な気持ち
だった
懐かしい気持ちと同時に心がちくっと痛んだ
私は彼と泊まったホテルは避けて
別のホテルに電話をしてみる
「今日なんですけど、お部屋空いてますか」
と私が尋ねた
夏休み中であったが平日だったので部屋は空いていたようだ
私はほっとした
私はまた車を走らせて能登へ向かった
途中で千里浜ドライブウェイへ向かった
千里浜は海岸付近まで車で入っていけるようになっている
元彼に連れてきてもらった場所だ
大阪の海とは比べものにならないくらい
透き通った海だ
彼の心の中を表しているかのような美しい海だった
「わぁい、海だ海だ」
と佳奈はおおはじゃぎだ
これからどうしようか…私は沈んでいた
静かに揺れている波をみていた
夕方になり、私は佳奈を連れてホテルへ向かった

部屋には美味しい海の幸が並べられていた
「パパにも食べさせてあげたいね」と佳奈はいった
もし、私達が離婚することになったら佳奈はどちらといることが幸せなんだろうか
そんなこと佳奈に決められるはずもない
佳奈は私も夫も同じだけ大切なんだろう
それならば私が夫の浮気で離婚することは無理かもしれない
私の気持ちで佳奈の幸せを奪う権利は私にはない
親だからといってなんでも押し付けたりしたくはなかった
佳奈の気持ちを最優先にしようと私は決意した
夫はどう考えているのかわからなかった
あの女と暮らすのか私とやり直してくれるのか…
もし、夫から離婚を言い出したら別れてもいい
そう思った

第六話　現実逃避（後書き）

評価、よろしくお願いします

第七話　害虫

夕食がすんで佳奈と一緒に温泉に入った
とても気持ちがいい
今だけは何もかも忘れられそうな気がした
翌朝、うちへ帰ることにした
いつまでもこうして旅を続けているわけにもいかない
先立つものもなくなってきた
私は夫と話し合う決意をして、帰宅した
佳奈は「やっぱりおうちがいいね」って嬉しそうに言った
私は帰る直前に薬局へ寄った
アルコール消毒剤を買ってうちに帰った
夕方についたからまさかこんな時間に夫はいないだろう
でも万が一ということもある
佳奈を車に乗せたままうちを覗いてきた
ドアを引いてみた…
「ガチャガチャ」
鍵はかかっていた
私は用心して鍵を開けて靴をみた
誰もいないようだ
どうして自分のうちなのにこんなに怯えなければならないんだろう・・・
不可思議な気持ちで私はすぐに車に戻った
そして佳奈を連れてきた私は佳奈を友達のおうちで遊ばせてもらい
その間に荷物を運ぶことにした
佳奈をすぐうちに入れられなかった
私は部屋という部屋を掃除した
害虫から佳奈を守らなければならない

片付けたままの部屋
それでも私はすみからすみまで掃除をした
とかくベッドルームは念入りに拭き掃除もした
それからアルコール消毒剤をだして部屋中を消毒していく
そんなことをしても女の存在は消せないことなどわかっていた
それでも何かせずにはいられなかった
テーブルや椅子は叩き割って壊してしまいたかった
食器もなにもかも捨ててしまいたかった
できればこの家ごと燃やしてしまい何もかも全て消してしまいたい
そんなこと…できるはずもない
だから私は消毒する
部屋という部屋、家具も何もかも全てを
消毒し続けた
夫もアルコール風呂へつけたいくらいだった
おかしくなるくらい掃除をしていた私は
夜ふけになっていることも気付かず
佳奈を迎えにいくことも忘れていた
「プルルルル…」電話の音にハッとして
私は意識を取り戻した
電話を取ると佳奈のお友達のママからの電話だった
「大丈夫？携帯に何度もメールしたのよ？でも返事がこないから。」
と彼女はいった
メール？気付かなかった…
「今から佳奈ちゃん連れていくね。」
「遅くまでごめんね。ありがとう」
とだけいって私は電話を切った
ふと我に帰って鏡に映った自分をみて驚いた
憎しみに満ちた老婆のようだった
私は自分でも気付かぬうちに夫と愛人を恨み
憎んで変わり果てた姿になっていた

私はあわてて髪をとかし、化粧をした
佳奈が帰ってくるまでには間に合った
そして消毒の臭いがプンプンする部屋へ佳奈を連れて行く
「ママー、なんかお注射のときの匂いがすごくするよ」
佳奈は嫌そうな顔をしている
すぐに臭いは消えるわよ
しばらくうちにいなかったから虫がいたらイヤでしょ？
と私がいうと
「虫はやだけど…」
と困り顔をしていた
「そういえば、メールしたのになんでゆかちゃんちに電話してくれなかったの？」
と佳奈は膨れっ面をしている
「ごめんごめん。メールに気付かなかったのよ」と私はズボンのポケットから携帯をだそうとした

第八話　携帯電話

あれ？
携帯がない
車の中かな
私は車の中に携帯を探しにいったが見当たらない
かばんにも見当たらなかった
「佳奈～ママの携帯しらない？」
と私は聞いてみた
「しらなーい」
と佳奈はいった
まさかどこかで無くしたんだろうか
私は焦った
携帯に電話をかけてみよう
もしかしたら誰か拾ってくれているかもしれないし
うちの中にあるなら音が聞こえるはずだ
私は携帯に電話をかけてみた
「プルルルル」
電波は届いている
うちのなかからは聞こえない
やっぱり外かぁ
どこで失くしたんだろう
誰もでないかと諦めていた
すると誰かが電話にでてくれた
神の救いだと思った。
「はい宮前です」
と男性が電話にでた。
「もしもし、高原と言いますが・・・
その携帯私のなんです。落としたみたいで。」

「そうだったんですか。今警察に持って行こうとしてたんです。」
よかった、いい人に拾われて
「それでー、今どこにその携帯はありますか？」と私が聞いたら
「今、石川県の金沢ですが」
えっっ…まさかホテルに置いていたんじゃ
私は恐る恐る聞いてみた「もしかしてホテルにありますか？」
「いいえ、違いますけど、ホテルの近くではありますが」
やばいな・・・送ってもらえるかな
「あの、私大阪に住んでいて、旅行で金沢へいってたんです。
携帯、着払いで送っていただけませんか？」
と私はいった
「大阪ですか？」
と宮前さんは言った。
「そうなんです」と私は申し訳なく言った。
すると宮前さんは
「私明日大阪に出張するんで、よかったら持って行きますよ。郵便より早いと思うし…。」
「そんな…いいんですか」
「昼前なら時間取れるから１１時頃天王寺駅の改札で。僕はグレーのスーツで黒の鞄を持っていますから。」
「わかりました。お言葉に甘えて、よろしくお願いします」
と私はいった
「お互い顔もわからないし…そうだ、僕があなたの携帯を持って待つことにしましょう。そうすればあなたは自分の携帯だとわかるはずです」
と宮前さんはいった。
「はい、わかりました。もし分からなければ私の携帯に電話しますので。」
と電話を切った。
フゥーとため息がでた

知らない男性と話すなんて結婚して以来初めてだった
すごく緊張してしまった
明日…どんな服を着ていこう
服装に気を使うのは久しぶりだった
普段は佳奈に汚されても構わない服をきて、たいていパンツをはいていた
明日は久しぶりにスカートでもはいてみようかな…
今夜はパックをして寝よう
遠足に行く前の子どものようにドキドキしていた
ただ携帯を受け取るだけ…
そんな些細なことなのに私は浮かれていた
こんな嬉しい気持ちは久しぶりだった
何もかも新鮮だった

第九話　彼との出会い

翌朝、夫は仕事に出かけた
夫は私のいつもと違う様子に気付いたのか
今日は出かけるのか？
と聞いてきた
私は別に、とはぐらかせた
夫からの電話に出られないと不信がられるので、携帯は壊れて修理に出していることにした
何かと細かいことにうるさいのだ
自分のやったことは何も話もせずに…何様のつもりなんだ
佳奈のためにも近いうちに話し合わなければならなかったが冷静に話すためにはもうしばらく時間を置く必要があった
それからしばらくして佳奈が起きてきた
私は佳奈を連れてうちをでた
そうして地下鉄に乗って天王寺へ向かった
待ち合わせの時間にはまだ少しある。
私は佳奈とデパートにいってみた
何かを買う目的があるわけではないのだが見ているだけでも楽しかった
ぶらぶらしているうちにもうすぐ待ち合わせの時間が近づいていたので私と佳奈は天王寺駅へ向かった
駅には沢山の人がいた
この中から宮前さんを見つけることが出来るだろうか
取りあえず改札口で待ってみた
電車が着くたびに沢山の人が降りてくる
私はあちらこちらに視線をやったが宮前さんらしき人はいない・・・
もう少し探してみよう
「ねえ、ママ。あの携帯ママのと同じだよ」と佳奈が私を引っ張っ

ていく
みると売店で何かを買っている男性がいる
グレーのスーツ、黒の鞄・・・携帯は・・・？
本当だ、私の携帯・・・だと思う
声をかけたほうがいいよね・・・
・・・・・・
・・・・・・
・・・・・・
はぁ・・・なんていったらいいんだろう
緊張して声がかけられない
もし間違っていたらどうしようか

「こんにちは」
と声をかけたのは佳奈だった
買い物が済んだ男性はっこちらを振り向いた
声が出せない私に
「あ、もしかしたら高原さんですか？」と携帯をみせてきた
「あ、はい・・・高原です」
この人だったんだ
「あの、拾っていただいてありがとうございました
それに届けていただいて、なんて言ったらいいか・・・」
「気にしないでください。仕事できたんですから。
それより少し時間あります？」と宮前さんは話してきた
「あ、はい・・・ありますけど」
「それはよかった。僕これから昼食食べようと思ってるんです。
良かったら一緒にどうですか？せっかくこうやって出会えたんだし
携帯を返すだけなんてもったいないな・・・」

「ほんとにいいんですか？」
「えぇ。どうぞ。」と宮前さんは笑う

私はなんだか胸が苦しくなった
この痛み・・・随分昔に忘れてきた痛み
切ない気持ち
私は少しだけ女の感覚が戻ってきていた

そして私は宮前さんが連れて行ってくれるというお店へ向かった
「ここなんです、一度来てみたかったんだけどこういう店って男一人じゃ入りづらくて…」
と宮前さんは言った
ランチバイキング…飲茶かあ
確かにお店の雰囲気は男一人で入れるような感じではなかった
カップルや女の子グループばかりだ
「おいしそう～」と私は本音がでてしまった
「でしょ？娘さんでも食べれるものもたくさんあるみたいだし…OKかな？」
「はい、喜んで。」
好きなものを頼んでもってきてもらう
佳奈もこういうのは大好きだから喜んでいる。
「娘は佳奈といいます、もうすぐ六歳になるんです」
「そうなんだね。佳奈ちゃん今日は一緒にご飯食べてくれてありがとうね」
佳奈は少しだけ恥ずかしそうに笑った
「あ、そうだ。これを渡しておかないとね」
と宮前さんは携帯を返してくれた。
「本当にありがとうございました。
届けてもらった上にお食事まで…あのこれ、交通費の足しにしてください」
と私は宮前さんに封筒を渡した。
「え、いいのかな？」

頷く私をみて、宮前さんは快く受け取ってくれた
「それではそろそろ次の仕事が入ってるので…今日はお昼一緒に食べてくれる人がいて楽しかった…お先に失礼します」
と宮前さんは一礼して店をでていってしまった
私もお辞儀をして佳奈と二人帰ることにした
帰りながら「おいしかったね」って佳奈と話していた
宮前さんはみるからに優しそうな感じだった
うちに帰ると緊張していたからかフゥーとため息がでた
私は着替えながら宮前さんとのランチを思い出していた
鏡に写った私は少しだけ綺麗にみえた
今日のことは心の隅にしまっておこう…

今なら夫に話しを聞き出せるかもしれない
そんな心のゆとりができていた

そうだそうだ…
携帯を失くさないようにしなきゃね
私はポケットに携帯をしまった
???
携帯に何か挟まっている…メモ用紙だ
私は携帯を開けてみた

宮前修二です
よかったら連絡ください待ってます

携帯の番号とアドレスが記入されていた

私は秘めたるメモに心が動揺していた…

第十話　夫の謝罪

昨夜私は眠れなかった
あのメモは何だったんだろう…正直にいうと、うれしかった
宮前さんに連絡をとることは嫌ではなかった
でも電話をする勇気もない
とりあえず私はこのメモを捨てるために携帯に宮前さんの連絡先を登録した
そして夫に見つかる前に処分した
別に慌てて捨てることもなかったのだが、要らない疑惑をもたれたくなかった
連絡先を知っている…だけのこと
私が連絡さえしなければ、二度と逢うこともない
私の連絡先を宮前さんは知らないのだから
私はそう自分に言い聞かせた
今日から新学期、長かった夏休みも終わった
佳奈は元気に幼稚園へ向かった
私は一人残された部屋で携帯を見つめる…
ブルブルブル…携帯が鳴った
私はドキッとして
携帯を開けた
なんだ夫からのメールだ何々？今日はめずらしく9時に帰るらしい
私は携帯を閉じた
私は誰からのメールを待っていたんだろう…電話を待っていたんだろうか
たぶんかかってくるはずのない相手を待っていたんだ…と思うと自分が怖かった
そんな気持ちに気付かないふりをして携帯を閉じる
今夜は夫が早く帰ってくる…話しをするにはちょうどよかった

佳奈を早めに寝かせて私は夫の帰りを待っていた
話し次第では離婚も覚悟していた
「ガチャガチャ…」玄関先で物音が聞こえる
夫が帰ってきたらしい
「おかえりなさい」と出迎える
夫の食事とお風呂がすんだら話しを切り出そう…そう思っていた
すると夫から先に話だした
「この前は俺が悪かった。あいつとはもう別れたんだ。だからもう忘れてくれないか」
と夫はいってきた
忘れてくれって…そんなことできるくらいならこんな苦しい思いはしない
それができないからつらいのに
「いつからの関係？」
と私は尋ねた。
「あの時が初めてだ。お前が留守だったからつい魔がさして…彼女は職場の後輩で…彼氏に振られたらしくて相談聞いていたらあんなことに…」
「へぇ～その日だけでよくお泊りの用意もできたねえ」
「あれは彼女が男と旅行にいくはずだったんだ。だけどそいつはこなかったらしくて…」
「それでうちにきたわけ？ずいぶん親しい後輩なのね」
私は怒りを押さえきれなくなってきた
「俺が職場からでて、うちに帰るときにみかけて…車に乗せて帰ってきた。」
「何で車に乗せたの？」
「彼女、一人で座って泣いていて・・・話が長くなりそうだったんだ。パジャマにはなっていたが体の関係は一切なかった」
パジャマ姿になっていて体の関係がないわけがない
偶然にも私があの時帰ってきたからこうやって分かっただけ・・・

馬鹿にするにも程がある
「あのね、子どもじゃないんだからね。体の関係が一切ないってどこに証拠があんのよ。別れたってどうやって信じればいいのよ。あなたは私を裏切ったのよ。たとえ体の関係がなかったとしても、私の留守に知らない女性をうちにいれるなんて非常識だわ。それにあなたは私に弁解するどころか、彼女を追い掛けていったのよ。そうでしょ？馬鹿な私はあなたとやり直そうと思って帰って来ていたのに…」
私は一気にまくし立てた
同時に頬に涙が伝わってくる
夫の前で泣きたくなかった
私の敗北を認めたような気がした
夫はそんな私をみて何も言わず抱きしめた…
私はその手を振りほどこうとしたがほどけない。すごい強い力で抱きしめてくる…
「離して…私のことなんかどうでもいいんでしょ」
夫は喋らない…そして私を抱きしめ続けた
その腕の中にいるうちに思考回路が麻痺してきた…
涙が溢れてくる・・・今まで我慢してきた想いが吹き出てくる
久しぶりに抱きしめられた夫の温もりは以前と変わらなかった…
とても居心地が良かった・・・
まだやり直せるんだろうか…
私の気持ち次第で二人は出発できるのだろうか…でももしまたこんなことがあったら…
「もう二度と夕子を傷つけたりしない」
話し出そうとする私の口を夫は塞いだ。そして私は混乱したまま夫に抱かれた…
そして夫の腕枕で眠った
ずっと一人で寝る日が続いたからか、人の温もりがあるベッドは心地よかった

夫は反省してやり直そうとしてくれている
私ももう一度壊れてしまった破片を繋ぎ合わせて温かい家庭を築いていこう…
肌と肌を触れ合わせたことで、トゲトゲしくなった私の心が少しだけ柔らかくなった気がした
ずっとこうしていたい…一人はもう嫌だった…
寂しい夜は過ごしたくなかった…
いつまでも永遠に愛されていたかった
私だけを見て私だけを愛して欲しかった

第十一話　惨めな結婚記念日

それからの毎日は少しずつ楽しく感じられるようになり、夫の顔を見ても苛立つこともなくなってきた
まだまだ悪夢は消えなかったが、少しずつ心の隅にしまえるようになっていた
季節は秋から冬へと過ぎていき、もうすぐ私たちの六回目の結構記念日がおとずれようとしていた
私達の結婚記念日は佳奈の誕生日と同じ日にちになっている
結婚式はもっと前に行ったのだが、やっぱり私達が結ばれたのも佳奈がいたからだと思い、佳奈が誕生した日に夫に届けを出してきてもらったのだった
その日は１２月１５日・・・あと二週間さきだ
今年もこの日を無事お祝いすることができそうでよかった
あれから夫は相変わらず仕事は忙しいものの、私達を気にしてくれるようになり、あの女性とも何もないみたいだった
この前の連休にも初めて佳奈を遊園地へ連れて行ってくれた
佳奈もすごく喜んでいて、私もうれしかった
結婚記念日はどうしようか・・・ワインでも買ってきてお祝いしようかな
夫が帰ってきたら相談してみよう
今夜も夫は遅くなるようで、私と佳奈はさきに夕飯を済ませた
佳奈が寝てしまってから夫は帰ってきた
どうやら今日は飲んできたようだ
かなり足元がふらついている
「大丈夫？」私は夫の体を支えながら部屋へと連れて行く
着替えながら夫は話した
「会社の忘年会今年は伊勢に行くらしいんだ。その日にちが…再来週の金曜日なんだよ。」え？再来週の金曜日って…佳奈の誕生日じ

ゃない
「ねえ、今年は断れないの？」
「無理だよ…俺が幹事なのに今更他のやつがしてくれるわけないだろ…今年は一週間前にお祝いして…な？わかってくれるだろ？」
わかってる…わかってるよ
あなたが仕事を優先することくらい…
「もういいよ、わかったから…」
私は酔っ払ってる夫を投げ出して自分のベッドに戻る
１５日だから意味があるんじゃない…私はもやもやしながら眠った
一週間後、夫は今日は早く帰ってくるからなとわざわざ言ってから仕事へ行ってしまった
まあ、後回しにされるよりはましだなと思い直して料理を仕込んでゆく
今夜はビーフシチューにサラダ・・・おいしいパンやさんに色々な種類のパンを買いに行く
そうだ・・・ケーキも買っておかなきゃ
私の好きなチョコレートケーキをホールで買って帰る
あとは佳奈のバースデープレゼントは…佳奈はビーズが大好きだからビーズをプレゼントに選んだ
あと気に入りそうなブーツを見かけたからそれも一緒に渡すことにした
さあこれで買うものは終わりかな…
うちに帰って部屋を飾り付ける
ワイングラスをだして…もうすぐ帰ってくるころかしら？
「まだかなー」佳奈も待ちわびて窓から外をのぞいていた…
「あ、パパだ！パパが帰ってきたよ、ママ」佳奈が嬉しそうに玄関に出迎えにいった
パパと一緒に夕飯が食べれることがめったにないから佳奈はすごくはしゃいでいた
食べ終わってプレゼントを渡す

佳奈はすごく気に入ってくれたようだった
佳奈はプレゼントを大事に抱えて寝てしまった
私は佳奈が寝入ったのを確認して、それを机の上におく
よかった。本当に…
私が片付けをしていると夫が後ろから寄ってきて抱きしめてきた
私は思ってもない夫の行動に動揺してしまった
「おやすみ…さきに寝るよ」と夫は寝室へいってしまった…
私の無意味な動揺は夫に伝わらないままだった
私達はいつからかお互い別々に寝るようになっていた
それは今に始まったことではない・・・結婚してから数年後のことだった
私が夜中にトイレに行きたくなって階段を降りてきたときだった
夫は夜中にＡＶを見ていたのだった
しかも下半身を露出して・・・一人でやっていた
私はその光景をみてトイレには行けず、夫が寝室に戻ってくるまで必死に耐えていた
布団に包まり・・・
夫は私がいるのに、ビデオのほうがよかったんだ
それはそうだろうと私は思った
私は胸が異常なくらい小さい・・・というかないのだ
そんな女…しかも妻となり・・・母となった私に魅力などあるわけがない
夫が私を抱けない理由は自分でもわかっていた…でもこの前のことがあってから私はもしかしたら…という期待を捨てきれずにいた
でも…やはり私ではだめだった
私は惨めだった・・・悲しかった
私はじっと携帯を見つめた・・・そしてあの人にメールを送ろうとしていた・・・

第十二話　愛って・・・満たされない想い

私は宮前さんにメールを送っていた
＜こんばんは。高原です
この前は携帯ありがとうございました
宮前さん…今度また大阪に来られますか？＞
当たり障りのないメールを送った…
返信を待ちながら私は考えていた
私は夫を愛していたから結婚した…
佳奈がいようといまいと関係なく私は夫と結婚していたはずだ
愛している人とずっと一緒にいたい…だから結婚する
でも結婚すれば否応なしに彼氏彼女の関係は薄くなり
子供ができたらなおさら家族という新しい愛の形に変化してゆく…
守るべきものへと変化してゆく
その時には付き合っていたころの感情なんて薄れて消えているかもしれない
それなら女が愛され続けるためには結婚するより
付き合っていたほうが愛されている実感を持ち続けられるのかもしれない
私は夫と結婚しなかったほうが幸せだったんだろうか…
「ブー、ブー…」携帯が鳴る
私はハッと我に帰り携帯をみる…
＜こんばんは、宮前です
夕子さんから連絡がないので
メモが落ちてなくなったんだろうと思って諦めてました
夕子さん、元気にしてますか？
僕は今月末に大阪に出張すると思います…
よかったらお昼いかがですか＞
返信…きてしまった…

どうしようと思う自分と楽しみにしている自分が私の中にいた
私はなぜ宮前さんにメールしたのだろう…
それはきっと私の中で満たされないものがあったから…
私が私でいたかったから…
それを確認したかったんだろう
私は宮前さんに返信した
＜日にちが決まったらメールください
待ってます＞
すぐに携帯が鳴る…
早いなあ～と私は携帯を開けた…
メールは宮前さんではなかった…
以前親友だった美加からのメールだった
＜結婚記念日おめでとう～もう六年だっけ？
いつも幸せそうで羨ましいわ
私も早く幸せになりたいもんだわ
今年もさぞかし豪華にお祝いしたんでしょ～？＞
ほんとにうっとうしい友達へと変わっていた…
ずっと連絡もないのにこういう日だけは必ずメールしてくる
＜ありがとう～
今夜はね～レストランで夜景をみながら食事して…
最後に薔薇の花束をもらって…
そのあとは私と佳奈にプレゼントを買ってくれたのよ～
今年はピンクダイヤの指輪だったわ
今年も最高の結婚記念日だったわ
あなたも早く結婚しなさいよ～女の幸せは結婚しかないんだから…
夫が呼んでるからまた後日メールするわ～おやすみ＞
メールを送ってまた一段と沈み込む…
自分のプライドにかけても今夜のみじめな結婚記念日は誰にも言えなかった…
嘘に嘘を重ねたメールを送ってしまった…

しばらくは会いたくない…
「ブー、ブー」また携帯が鳴る…
私は恐る恐る携帯を開けた…
あ、宮前さんからだ…
＜わかったら連絡するね
夕子さんこれからも時々メールしてもいいかな？
迷惑になるようなことはしないから…
じゃまた明日おやすみなさい＞
明日からは少し違う毎日がやってきそうで私はドキドキしていた…

第十三話　裏切り

私は宮前さんにメールを送ってしまったことを後悔などしていなかった
なぜなら宮前さんには好意はあるが恋愛感情がでてくるようには思えなかった
初めて会ったときに佳奈を連れて会っている…
私には家庭があることは宮前さんは当然わかっているはずだ
もしも…もしも男女の仲になったとしても私達には未来などない
先に進めない恋…
だから私は変に安心してしまい、時々メールを送っていた
明日は夫が社員旅行に行く日だ
荷物といってもしれてるが、用意しておいた
旅行でも仕事でもどちらにしても、うちにはいないのだ
私と佳奈にとってはいつもと同じだった
翌朝、夫は早々とうちをでて車で行ってしまった
佳奈と一緒にテレビをみていたときだった…
「ブルッブルッ」
聞き慣れない携帯の振動音がする…
あ、テーブルのうえに夫は携帯を忘れていた…
携帯は振動し続けている…
職場の方からだろうか…出る必要はないかな…
迷ってる間に振動は止んだ
しかしすぐにまた振動しだした…
大事な用件かもしれない
夫に断りもなく私は携帯を手にとった…
メールみたいだ…「早くきて…」
送ってきてるのは…森山さん…らしい
聞いたことないな…

メールの内容みるべきかどうか…
とりあえず携帯を置いて夫の部下である川内さんに電話してみる…
川内さんとは家族ぐるみのお付き合いをしている
「あ、もしもし。高原ですけど…
夫が携帯を忘れて出かけてしまって…
電話が鳴っていたこと伝えてもらえます？」
「僕は今日出勤するんで…高原係長は今日はお休みですよね…
僕は会えそうにないのですみません。」
休み…？旅行じゃないの？
「え？あなたは行かなかったの？社員旅行なのに仕事？大変ねえ…」
「社員旅行…？あぁ…僕は明日予定があったので…」
明らかに声が動揺している。
「そうなの…社員旅行どこに行くって聞いてる？」私は問い質した
夕子さん知らないんですか？」
「一度聞いたような気はするんだけど…白浜だった？
ホテル名がわかれば電話できるんだけど…」
「いやー僕も白浜以外は参加する予定もなかったし…ホテルまで知らないです…」
「わかったわ。忙しいのにごめんね」
「いえ…お役に立てなくて…」

嘘だ…嘘だ嘘だ

夫は伊勢に向かったはず…社員旅行と偽ってまで出かけた相手…
私はさっと夫の携帯を佳奈が寝静まってから手に取った
さっきの森山っていうメールをみてみる…
「ねえ、まだなの？私ずっと待ってるの…
早くあなたに会いたい…外は寒いよ…早く抱きしめて…由希」
何回も同じメールが来ている…
１１時頃からはメールは途絶えていた…

私は勘が働いてすぐにあの女だとわかった…
うちに出入りしたあの女…
私はガク然とした
なんで…まだ続いていたの…？
別れたって私を抱いたあの時も私をみてなかったの？
ほんとなら今日、結婚記念日なのに…私よりあの女を選んだんだ
私は涙がボロボロこぼれた…
心が潰れてしまいそうだった
私は夫の携帯の電源を切った
これ以上みたくなかった…
これ以上みたら気が狂いそうだった
そしてポケットから自分の携帯をとりだした
ー助けて…助けて…
私もう何も信じられない…ー
私は宮前さんにメールを送った…
すぐに電話が鳴る…
メールではない…電話だった
私は電話にでた
「もしもし…夕子です」それだけ言うのがやっとだった…
泣きじゃくってしまい声がだせない
「夕子さん…どうしたの？旦那さんと何かあった？」
宮前さんは私に優しい声で話し掛けてくる…
前々からメールで夫が浮気したことや
気持ちがすれ違っていることなどを宮前さんには話していた
だからだいたいの見当はついているのかもしれない…
「夫にまた裏切られて…今日結婚記念日なのに前の女と伊勢にいってしまって…」
「そう…つらかったねすぐにでも夕子の傍にいってあげたいんだけど
僕は今プロジェクトの真っ最中なんだ…
来週の金曜日、大阪にいく…夕子に逢いにいくよ

もう今日のことは忘れて…
僕は夕子の傍にずっといるから
今は金沢だけど…心は夕子の隣にいるから
泣かないで…夕子…夕子…
僕は夕子を愛してるんだ…
僕は夕子を大切にする…僕のところにおいで…」

心の中にトーントーンと彼の言葉が染み渡ってゆく…

凍りつき憎しみの塊となっていた私の心を少しずつ温かい物が流れていく…
私の心は少しずつ血が流れ出した…
温もりが戻ってくる…

「来週…金曜日修二さんと会える…」

私は呪文のように繰り返した
「そうだよ、夕子に逢いにいくから
いつでもメールして…一旦電話切るね」
「ありがとう…修二さん」
私は電話を切った…
私は来週修二さんに逢いに行く…
それは夫を裏切ることになりかねない…
逢えばきっと…

きっと…
もう、今までの私には戻れないだろう…

来週逢いに行かなかったら…？
今までどおりの生活…

そんなこと耐えられない
ただ年老いてゆくだけ…
それなら私は死んでいるのと同じ…
来週、修二さんに逢いに行こう…
私はそう決心した

日曜日夫は何食わぬ顔で帰ってきた…
「お帰りなさい…どうだった？伊勢…楽しかった？」
夫はうろたえもしない…
「あなた携帯忘れていったでしょ」
「ああ、それで川内に電話したんだろ…今日、会社寄って帰ってきたあいつ、俺に気を使って…お前どうしたい？俺と別れたいか…」
何？何なの？自分のやったこと何とも思わずに私に一言も謝りもせずに…
私は言ってやった
「どうして別れなきゃならないの？
あなたこそ別れなきゃならないようなやましいことでもあるの？」
「お前…我慢できるのかよ
俺とあいつのこと…
俺はあいつと別れる気はない
本気で好きになってしまったんだ…
あいつのことを受け止めてやりたい…
お前さえよければ…できることなら俺は別れたくはない…
会社での地位もあるからな…」
いつでもどんなときも会社…会社って…
「受け止めるって…あなた佳奈はどうするの？
佳奈の父親はあなたしかいないのよ。」
「佳奈…ほんとに俺の子かよ…前の男の残したもんじゃないのかよ…」
「なんて…ひどい…私をあなたと一緒にしないで…

佳奈は紛れもなくあなたの子供なのよ…
もういい…
私もこのままでいいわよ…
そのかわり私も自由にさせてもらうから…」
「ああ、好きにしてくれ…俺はもう寝る
　俺のことはほっておいてくれ」
夫はそういって寝てしまった
話しながら私の頭の中はフル回転していた
離婚するべきかどうか…私も夫も互いに愛してなどいない

それは事実だった

それなら夫婦でいることに意味はないかもしれない
でも佳奈はどうだろう…
それに今別れたら夫の思うツボだ…
あの女と再婚しかねない
夫だけ身勝手な幸せを掴むことは許せなかった…
私は心の底から夫を愛していたのに…
もうやめよう
考えるのはよそう
なかなか眠れないまま朝がやってきた

第十三話　裏切り（後書き）

宜しければ評価、感想をお聞かせください。
よろしくお願いします

第十四話　ドラッグ

とうとう、修二さんと逢う日がきた
私はどれだけ心待ちにしていたことか
今日は佳奈も幼稚園だし、二人きり…少し緊張する
前と同じ時間と場所、今日はどこにいくのかしら？
そんなことを考えながらメールしてみる
ー駅につきました・・・修二さんはまだ電車？ー
メールを送って待っていた
するとすっと目の前に誰かがきた…見上げると修二さんがいた
「夕子…来てくれたんだね
あれから少しは冷静になれた？」
すっと修二さんは私の手をポケットにいれて歩き出した
すごく温かい手…私の心に染み渡って行く…
ただ手を繋いだだけなのに、それだけのことなのに…涙がでてくる
外はこんなに寒いのに私は暖かい気持ちでいっぱいだった
「今日のランチはイタリアンでいいかい？」
「ええ」と私が答えると、そのまま手を引いて私を店に連れて行く…
それが強引でもなく、優柔不断でもなく、ごく自然な感じで私に接してくる
修二さん歳はいくつくらいだろうか…夫と同じくらいだろうか
食事をしながら私に話し掛けてくる
「夕子…僕のことどう思ってる？」
私は修二さんをどう思ってるか…
「えっと…」私は返事に困った…
「多少は僕に興味があるから今日だってここに来てくれたんだよね」
「修二さんといるとありのままの自分でいることができるから…安心できるっていうか」
「そっか・・・それは僕とのこと現在進行形ってことだよね？

僕は夕子を守ってあげたい…」
そういって修二さんは私の手をにぎってきた
私は修二さんとの未来は有り得ないと思っていた
でもよく考えてみたら私は夫とも未来はないのだ
このまま一緒に暮らしていくだけで心も体も繋がらない
それなら修二さんと一歩踏み出してもいいんじゃないか…
私は修二さんともっと一緒にいたい…
「私も修二さんと一緒にいたい…」
私は心の中の声を本当に発した
それからの修二さんは私にもっと優しくしてくれるようになった
別れ際に小さな公園の隅で修二さんは私を抱きしめた…
とても暖かい…なんて居心地のいい場所…
私はこのまま眠ってしまいたい…
人に愛されるというのはこういうことなんだ
私は抱きしめられて完全に思考回路が麻痺していた…
そしていつまでもこうしていたかった…
夫や大切な佳奈のことさえ頭から消え失せていた
「また年明けには大阪にくるから…夕子、それまでは電話とメールで我慢して」
コクンと私は頷いて一歩下がる
「修二さん…」
「修二でいいよ」
「ありがとう。今日は楽しかった。私携帯を落としてよかった
こうやって修二と出逢えたから…」
「そうだね…でも偶然じゃなく必然的だったんだけどね…じゃまたメールするね」
意味ありげなことを言い残して修二は仕事にいった
私は佳奈を幼稚園に迎えに行く為ダッシュで帰った
修二の温もりは消えなかった
抱きしめられた感触も手を握った感触も全て残っていた

私は修二と言う名のドラッグに手を出してしまったのだ
ドラッグというものは一度手をだすとやめられなくなると聞いてはいたけど
ほんとにそうなってしまっていた
うちに帰っても何をしていても修二のことを考えてしまう…
かなり重症患者だった
「ママ～」
佳奈の呼ぶ声で現実に戻ることができた
夕御飯を食べて一緒にお風呂に入り寝かせる
佳奈がいる間はママでいることができたが
夜は女になっていた
あまりメールを送っても修二の負担になるかと思うと
なかなかメールも送れない…
修二からのメールを待ってから返信する毎日
時々は電話で話したりもする
逢えないとなるとなおさら逢いたさも募ってくる…
私の頭の中には夫の存在などないに等しかった

第十四話　ドラッグ（後書き）

評価、感想など良かったらお聞かせください。

第十五話　消えた夫婦愛

年末年始と大慌てで過ぎて行った
今年の四月から佳奈も小学校へ行く
あんなに小さかった佳奈
それが今ではこんなに成長し、一人前に私に反抗もするようになってきた
冬休み最終日、私は佳奈を連れてデパートに来ていた
佳奈のランドセルを選びにきたのだ
ランドセルといっても、値段もピンキリ、色も形も多種多様
私が子供のころは女の子は赤、男の子は黒だったが、今は違うらしい
佳奈の意見を聞きつつ、私の許せる範囲のものを選ぶ
形はごく普通のランドセルに決まったが、色を悩んでいた
悩むくらいなら赤にすれば？と言ってみても無駄だった
時間をかけて選んだランドセルはローズピンク…赤に近いピンク色って感じ
あと必要な文房具などを揃えた
次に机を見に行った
前から欲しがっていた、ベッドつきのデスクを買う
届けてもらうのは三月にしておいた
あとは入学式の服を買うだけ…それは春休みになってから買うことにした
こんなにたくさん佳奈の為に買うことは今までなかったから佳奈はすごくうれしそうだった
私も佳奈の喜ぶ顔を見て、久しぶりに家族っていう感じがした
夫のことはもうどうでもよかった
夫は相変わらず不倫を続けている
週末は泊まりにいくようになってしまい、最近では普段も朝帰りするようになってきていた

私はそれを見てみぬ振りをする
私にはもうどうしようもない
私に振り向かせることなど不可能だった
私達は一体何の為に結婚したのだろうか…
あれだけ愛していた気持ちもたった六年で消え失せてしまうものなのか

私の心の中にはまだ夫への未練があった

でもそんな自分は大嫌いだった
他の女に手を出して本気になってる男をまだ追い求めている自分に腹が立った

そんな男、捨ててしまえ

そう言っている自分がいた
今日も夫は帰ってこない…
私は一人布団に入り修二にメールする

ーこんばんは
修二、今何してる？
修二に逢いたい…ー

一人の夜は寂しかった
誰かそばにいてほしい…私は布団にうずくまる
「ブー、ブー」携帯がなった
私は急いで携帯を開ける…修二だ

ー夕子眠れないのかい？僕も一人ベッドで寝ているよ
来週、神戸に夕子来れる？

泊まりの仕事なんだ…
佳奈ちゃんも連れて神戸に遊びにおいでー

神戸かあ
結婚してからは一度も行ってないな・・・
佳奈と異人館に行ったり南京町で美味しい中華を食べるのもいいな
何より修二に逢える…
私はすぐメールした

ーＯＫです
お昼は南京町で中華？
楽しみだよー

しばらくしてメールが帰ってくる

ーお昼じゃないんだ…夜一緒に食べよう
夕子、佳奈ちゃんと泊まる用意しておいで
わかった？
俺、ホテル予約してるから
その日は一緒に寝ようなー

お泊り…一緒に寝る…
いつかはそうなるかもしれないと思っていたけど早すぎない？
コンプレックスを持っていた私は修二に抱かれることが怖かった…
でも修二に逢いたい…
あの腕の中で眠りたい
私は了解のメールを送った
私はもう自分を抑えることができなくなっていた
理性がなくなっていた

愛してほしい、愛されたい
自分を必要としてほしい…
ただそれだけの想いで私は修二に逢いにいった

夫が私にしたことと同じことをしようとしてるなんて
その時の私にはわからなかった

第十五話　消えた夫婦愛（後書き）

後半に向けて頑張って書いています。最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

第十六話　密会

とうとう神戸に行く日になった
夫には何も言わないまま出かけることになってしまった
佳奈は旅行だと知って喜んでいる
私はその無邪気な笑顔に申し訳ない気がした
佳奈の為に着たわけではない…
自分の欲望を満たす為に佳奈は連れて来られただけだ
私はせめて彼と会うまでは佳奈と思いっきり楽しもうと心に決めた
夕方まで、遊園地で佳奈と一緒に遊んだ
そして、今日泊まるホテルへと向かう
ホテルで夕食をとり、疲れたのか佳奈は早めに寝てしまった…
やはり遊園地へ連れて行って正解だった
私は一人彼からの連絡を待つ
今日は仕事が忙しいと聞いていた…
もしかしたら逢えないかもしれない
窓から夜景を見ながらワインを飲む
今夜は外は雪がちらついていた
「コンコン」
ドアをたたく音がする
同時にメールがきた
＜開けてくれる？＞
修二がきた…
私は急いで鍵を外し、そうっとドアを開ける
外の寒さで冷え切った修二が立っていた
「入って」
私は修二を部屋に入れた
「寒かった…」
言い終わらないうちに修二に塞がれてしまう

修二の唇は氷のように冷たかった
抱きしめられた体も冷え切っていた…
でも少しずつ抱き合ううちに温もりが感じられた
「こんな時間に夕子を抱きしめることができるなんて…
すごくうれしい今日はきてくれないかと思ったよ」
「どうして？」
と私は尋ねた
「泊まりだからさ…」
さらに力強く抱きしめられた
私は余りの幸福に気を失いそうだった

修二の腕の中は温かくて…

「ねえ、修二は私のどこが好き？」
修二の腕の中にうずくまりながら私は聞いた
「全てさ。俺は金沢の公園で夕子を見かけたときからずっと…」
そういいながら修二は体を起こして私の髪を撫でる…
そしてソファーにもたれ私を抱っこしながら話し出す
私は修二にもたれて話しを聞いていた

「あの時だよ
夕子が携帯を落とした公園、あの公園に僕もいたんだ
夕子…あの時泣いていた
ベンチから立ち上がるときにポケットから携帯が落ちたんだ
僕はすぐ拾いに行った
夕子に渡してあげなきゃって思った

でも今返したら僕は夕子と接点がなくなる
だから僕は夕子の携帯…ポケットにしまいこんだ
きっと夕子は携帯に電話をかけてくるだろうと思ってさ

「そして私は携帯に電話をかけた…」

「そう。かかってこなかったらどうしようかと思ったよ
でも君はかけてきた
僕はラッキーだと思ったよ
もう一度君に逢える…夕子に逢いたかった
愛してしまったから…一目惚れだったよ」

こんな私を好きになってくれる人もいるんだ…ってその時思った
固い殻をいくつもいくつもかぶり
強く強く生きてきた私は本当は弱くて寂しいがりやだったことを思い出した

「夕子を泣かせたくない…悲しい思いをさせたくないんだ」
「私、わがままだから修二とずっと一緒にいたいって言ってしまうかも…修二…困るよね」
「僕は困らないよ・・・夕子を愛してるから」
ほんとに?
ほんとに私なんかでいいの?

夫もいる…
子供もいる…
そんな私が愛されるなんて信じられなかった

「ねえ、修二。私として…気持ちよかった?」
すると修二は笑い出した

「夕子はどうだった?僕は一つになれて嬉しかった…

でも夕子とそういうことしたいから声かけたんじゃないよ
携帯返したとき、初めてごはん食べに行っただろ？
あの時かな、やっぱり好きになった通りの子だなって
外見と中身が同じだった
僕は夕子が居てくれるだけでいい
夕子のその雰囲気が居心地いいんだよ
仕事のやなことも忘れられるんだ…」

「ごめん、変なこと聞いて…
私ね、修二に出逢うまでは自分を失くして生きていた
楽しいことも嬉しいことも悲しいことも…感情が麻痺していた
でも修二とこうやって話しているとすごく落ち着く
ここは私がいてもいい場所なんだよね…
私今日修二に抱かれて、やなこと全部忘れられそう…すごく嬉しかった
私はもう修二がいないと生きてけないよ…
どうしてもっと早く出逢えなかったのかな」

「今だからよかったんだよ
僕は夕子が独身だったとしても結婚はしないから…
だからこれでよかったんだ
好きだから…」

「好きだったら結婚しないの？どうして？」

「僕だけの女でいてほしいから
ただそれだけだよ
結婚なんかしなくても生活していけるのに
なぜそんな結婚にこだわる？
結婚したら煩わしいことが増えて

愛や恋や言えなくなるのは当然だよ
結婚しないこの距離が一生愛せるんだよ
だからどちらかだよな・・・僕みたいなタイプは結婚は不向き
結婚して子供産んで家庭を持ちたいなら家族愛に生きるしかないね
夕子は俺と同じタイプだと思うけどな」

「じゃあ結婚した女性はみんな私と同じような気持ちで生きてるの？」

「そうとは限らないよ
子供が産まれた時点で家族愛に上手く切り替われる人がほとんどさ
夕子みたいなタイプは数少ないと思うよ
夕子は情が深いんだ・・・だから愛が大きすぎてコントロールしにくい
しかも旦那は浮気性・・・悪条件が重なり過ぎたんだね
でも僕はそういう夕子が好きなんだよ」

「よくわかんないよ…」
「夕子には難しかったかな？夕子はまだ若いから…」
「若いって３４だよ？」
「…俺はプラス７」

修二が４１歳…全然見えないよ
修二は私よりずっと大人なんだ
だから安心できるのかな
なんだか眠たくなってきた…
時計は４時を指していた

修二…愛してる

愛してるよ
ずっと私のそばにいて…離さないで…

私はそのまま眠ってしまったみたい
朝目が覚めると修二はいなかった
私の手の中にメモが残されていた

来週から大阪に転勤になった…昼また逢おうな

修二にこれから毎日逢うこともできるんだ…
私はすごく嬉しかった
私はとても幸せだった

そのまま私は佳奈を連れてうちへ帰った
佳奈は昨夜のことを何もわかっていないようだった
うちに帰って部屋に入るとなんだか部屋が薄汚れて見えた

修二といた時間はあんなにも満たされていたのに
修二といた時間はあんなにも輝いていたのに

うちに帰るとそんな想いも消されてしまった
何をしても楽しくない

修二に逢いたい…昨日あったばかりなのに

今すぐ逢いたい

私には修二しか見えていなかった
修二だけが全てだった

第十六話　密会（後書き）

読んでいただいてありがとうございました。よければ評価、感想いただきたいです。

第十七話　愛のある日々

それからの毎日は修二との甘い秘め事ばかりとなった
私は相変わらず修二に何度もメールする
修二はその都度メールを返してくれた
彼は仕事柄、時間は融通がきくらしい
お昼はいつも一緒にごはんを食べた

毎日外食も味気ないし私はお弁当を作っていったりもした
会うのはいつも車の中
車中デートだった
人通りの少ない場所に車を停めてごはんを食べる
二人で食べるご飯はおいしかった
それから色んな話をする

抱きしめて…キスをした

ほんの少しの時間だけど私には貴重な時間だった
修二と会えるなら、何時でもいい…
ほんの数分でもいい…
どんな予定もキャンセルして私は修二に合わせた
あっという間に楽しい時間は過ぎて行く…
名残惜しく私は修二の手を離した

次の営業先に行く前にうちの近くまで修二は送ってくれる
夫に見つかりはしないかとヒヤヒヤしながら帰る
その割には運転してる修二に膝枕をしてもらい
私は修二の顔をみあげながら車に乗っていた
なんて大胆なんだろうとうちに帰ってからは思うのだが、

修二といるときは夢中になっていてなんとも思わなかった
修二にしか自分はわかってもらえない…
女として見てもらえない

そう思っていた私は修二といる時間が全てになっていた

修二といるときの自分は大好きだった

修二に会えない日は耐えられなくて、
イライラが募り爆発しそうになっていた

今までは我慢できたことも
一度愛される喜びを知ってしまった私は孤独に耐えられなかった
そうして私は、修二の深い愛にはまっていった…

第十七話　愛のある日々（後書き）

読んでいただいてありがとうございました

第十八話　本音

今日はもう少ししたら修二が迎えにきてくれる…
私は修二がくるのを待ちながら雨が降る公園で一人佇んでいた
この寒い中、雨が降ってる公園へ来る人などいない
私は寒さに震えながら待っていた

修二がきたのは一時間も後だった
仕事で連絡できなかったらしい…
泣きそうになる私の顔をみて、修二は私を抱きしめた
「こんな寒いのに、ずっと待たせてごめんな。もう帰ってるかと思ったよ…」
「修二に逢えるならこれくらいなんてことないよ。逢えない方がよっぽとつらいよ」

私は涙が落ちそうになる

「夕子…夕子を小さくできたらいつでもポケットに入れてどこにでも連れて行けるのにな。
このまま夕子を連れて行けたらどんなにいいだろ。」

「その言葉だけで十分だよ。私はあなたに逢えるだけでいい。
こうやってほんの少しでも傍にいられるのならそれで十分だよ。
私ね、いつも私は夫の世話をし、娘の世話をして家事をして。
私のことなんか誰も心配なんかしないの・・・

母親は強くなきゃダメなんだって
主婦はうちのことして当たり前なんだって
夫は仕事してるから、休みの日は何にもしないんだって

私って何だろうって思っていたよ

家事をするロボット？

家政婦？

そうじゃないよ…
そうじゃない…

私は人間だよ
私だって風邪も引くし病気にもなるかもしれない
熱がでても誰も知らない…
風邪を引いてもしらんふり

私だって気にかけてもらいたかった…
どうして、私は大丈夫なの？
そんなことない…
もう耐えられない…
そう思っていた

そんなとき、修二に逢って、修二の声が余りにも優しいから…
私を気遣ってくれるから…
私は修二を愛してしまった
もう元には戻れないの」

私は今まで誰にも話せなかった心の中の声を修二に話した
「僕は夕子のこと、愛してるし大事だよ。
　ねえ、夕子…そんな思いをしてまで、旦那さんと別れようとは思わないの？

やっぱり不安なの？夕子なら一人でもやっていける気がするんだけど…」
「佳奈のことが一番大切だから。佳奈を傷つけるようなことはなるべくしたくないの…」

それは本当のことだった
不安…ないわけではない
今まで働いたこともないし…
やはりシングルマザーになるのは抵抗もあった

どうしたらいいんだろう・・・
「そっか。わかった。そんな簡単なことじゃないよな。
夕子のしたいようにすればいいよ。僕はそれを応援するから。」

修二は私の表情をみて、悩んでいることがわかったんだろう
私は修二の優しさに癒されていた

「今度さ…三月に休み取れそうなんだけど夕子、スキーいかない？」と修二は誘ってきた
私を気遣ってのことだろう
私は修二とならどこでも行きたい
「仕事、無理してない？大丈夫なの？私、修二に会えるだけでいいんだよ？」
「大丈夫さ。夕子いくだろ？実はもう予約しちゃったんだ」と修二は笑う
「うん。行きたい。どこへ行くの？」
「長野だよ。佳奈ちゃんスキースクールに入れたら滑れるようになるよ。
日にちはね…3月26、27日だよ。」
スキー…昼間に修二に会うことになる

佳奈を連れて行けば、夫に話してしまうかもしれない
そうしたら、もし離婚するとなったら私にも過失がかかってしまう
慰謝料がもらえなくなるかもしれない…

私はあれだけ夫に尽くしてきたのに報われず、
慰謝料ももらえなかったら夫の思うままだ
それは絶対に避けなければならない
なら修二との旅行は諦めるか…
どちらも選べない
私は悩んだ
悩み抜いた末、私が出した結論は佳奈を実家に預けていくことにした
二日だけさきに佳奈を連れて行き、私もそのあと実家でのんびりしよう…
そう、それがいい
これで夫にばれず、修二と二人だけで旅行にいくことができる
私は修二への純粋な愛とは裏腹にしたたかな女へと変わっていた

第十九話　無関心

私が深夜、修二といく旅行のパンフレットをみていたときだった
携帯がなった
私は携帯を開けてみてみると…
また久しぶりにきた美加からのメールだった…
今度は何…？
私はメールに添付されていた写真をみて驚いた
夫の横で肌をあらわにした美加が寝ている…
美加の豊満な胸に手をやりながら…
これは今撮ったものだろう…
うちには夫はいない
ーどうしてもしたいって言われて…
夕子～ごめんね
隠したりしたくなかったのよー
あぁ、そう
だからってわざわざ写真を送ってこなくてもいいのに・・・
嫌がらせとしか思えなかった
私には夫なんてどうでもいい
私は
ーお好きにどうぞー
とメールを返した

この、夫への嫉妬がないメールが後々悲劇を生むことになる…
そしてそれは私への天罰だった

美加は何度も何度も執拗に写真を送ってきた
無関心だった私は夫に問い質すこともなく、
何事もなかったように毎日が過ぎて行く

そしていつしか季節は過ぎ行き、三月になった
寒さもまだ残っているが、少しずつ春をかんじられるようにもなってきた

私は修二との愛を深めていた
繋がりが強くなるに連れて、私は不安定だった自分の心も落ち着いて来ているのがわかった
あと二週間、そうしたら修二と旅行にいく
旅行から帰って来たら夫とは離婚しよう…そう思っていた
修二を愛すれは愛するほど、夫への無関心な自分がわかってきた

憎んでもいない…
愛もない…
今では夫が他で何をしようと腹も立たなくなった
怒ってる間は愛もあったんだろう
無関心な今は愛もない
同情すらない

もうお互い別々の人生を歩んでいくべきだろう…
きっと夫もそう望んでいるとばかり思っていた

もう、私達は佳奈を通してしか話さなくなった

我が家は完全に壊れたんだ…

私は夫に来週の旅行のことを話した
「友達とスキーにいってくるので、佳奈はおばあちゃんに預けていきます」
「わかった。」
一言だけの会話だった

第二十話　同じ想い

私はスキーにいく日の前日、実家に帰った
私の姿をみるなり、よほど心配になったのか
ゆっくり温泉にでもつかって、気分転換しておいで…
佳奈はおばあちゃんに任せときと早くいっておいでと追い出された

よほど疲れているようにみえたのだろうか…
母に少しだけ後ろめたい気がした…
私は佳奈が昼寝してから車で実家をあとにした
佳奈を置いてでかけるなんて初めてのことだった

心がちくっと痛んだ
そんな痛みを消すかのように私は車を飛ばした
そして修二に逢いにいった
私は修二に会うと
今までもやもやとしていた自分の気持ちが一瞬にして消え去ったのがわかった

修二は会うなり、佳奈のことを聞いてきた
私は佳奈を実家に預けてきたことを話した
すると修二は少し悩んでこういった
「佳奈ちゃん連れてこれなかったか・・・そうだよな
　僕と会ってるとこ旦那さんにバレたらまずいか…夕子無理させてごめん」
「ううん。大丈夫だよ
　私も佳奈が春休みの間は実家に帰るの
　だからしばらく修二と会えなくなるけど…」
「そっか…しばらく夕子と会えないんだね

毎日会っていたからなんだか寂しいよ」
「ほんとに…だから今日と明日はおもいっきり修二と楽しみたい」
私たちは車に乗り長野へ向かった
私は音楽を聴きながら初めて見る景色を眺めていた
そして私は携帯の電源をＯｆｆにした
二人だけの時間を邪魔されたくなかったのだ
無事にスキー場へ着いた私達は早速ウェアと板を借りてゲレンデに向かった
「修二はスキーよくやるの？」
「そうだな…年二回くらいだけど、結構楽しいよ」
「私なんか学校のスキー合宿しか行ったことなくて…足手まといになるかもしれないけど」
「大丈夫。まかせときな。僕がリードするから」
私は恐る恐る滑り出す…なんとか滑れそうだ
「夕子、上手い上手い」
私はすべるのに必死で修二の声が聞こえなかった
あー、緊張した
でも体を使って遊ぶのって気持ちいい
体もあついくらいになってきた
だいぶ慣れてきたころ夕方になってしまい、私達はホテルへ移動した
部屋へ荷物を置き、早速温泉へ行った
温かいお湯が体にしみ渡って行く
昨夜は車のなかで寝たからか・・・肩が痛い
温泉につかりながらもみほぐす
「ずいぶんゆっくり浸かっていたね」と修二に言われてしまった
「久しぶりの温泉だったから気持ちよくて」

「さあ、夕飯たべようか…お腹空いただろ？」
修二は私の手をとって部屋へ連れて行った

部屋に挨拶にきた女将さんは
「きれいな奥さんですね」
と修二に話してきた
奥さん…に見えるのかな

修二の奥さんに

いい年して二人で温泉にきたら誰でもそう思うか…なんて思った
「おいしいね・・・佳奈に…」
言いかけて私は口を塞ぐ
佳奈のことはだすべきではなかった
修二はそんなこと気にもならない様子で私にビールをついでくれた
「おいしいだろ？あとで佳奈ちゃんにもお土産にしてもらおうな」
って言ってくれた
「夕子…愛してる。出逢ってまだ半年だけどずっと前から一緒にいる気がするよ」
と修二は私のおでこにキスをした
口にも胸にも…体中キスしてくれた
そして今夜はベッドの中で二人一緒に眠った
次の朝、目が覚めると横には修二が眠っていた

第二十一話　天罰

朝食をすませ、昼まで一滑りしてから帰ることになった
私は修二を送ってから実家に向かおうと思っていたが
このまま金沢によって仕事をしてくるらしい
私は一人で帰ることになった
車にはナビがついているから私だけでも運転できるだろう…
私は修二にお礼のメールを入れようと携帯をオンにする
するといきなり電話がかかってきた…
私の実家からだった
どうしたんだろう…とすぐに電話にでた
「夕子、今まで電話かからんかったよ。佳奈が佳奈が…」
「佳奈がどうしたん？怪我でもしたん？携帯つながらんかったんよ…」
と私は嘘をついた
「佳奈がな…夕子が出かけた日の夕方に一人で山にいったらしくて…行方がわからんようになって…」
「なんで？なんで山にいかしたん？」
「夕子を追い掛けて山に一人で…誰にも言わんといったらしい」
「それで？佳奈はどうしたん？まだわからんの？」
「それが…昨日の夕方…山の中から見つかって…」
「それで…？」
「まだ夜の山は寒いから…凍死だった…」
「え？なんていったん？」
「佳奈は死んでしまったん…」
母は泣いてしまいそれからは話にならなかった…

佳奈が…佳奈が…
私が一番大切な佳奈が…

寒い山で一人孤独に死んでいったなんて…
しかも私を探して追い掛けて…

私のせいだ…
私が佳奈を実家に預けたから…
佳奈を一緒に連れて行っていればこんなことにはならなかった…
私は体に力が入らなくてその場に倒れ込んだ…
「今夜が通夜で…明日が葬式だから…夕子何時に帰って来れる？」
「すぐに帰るから…通夜には間に合うと思う…」
「夕子、私がちゃんとみとったら山いくの止められたんに…
ごめんな…まさか一人であの山いくと思わなかったんよ…」
「お母さんのせいじゃない…私が悪かったんよ…
私が一人楽しんだから…罰が当たったんよ…」
「そんなことない…夕子は悪くない…自分を責めたらあかんよ…
車気をつけて…早く顔見てやってな…」
電話が切れた…
私はようやく立ち上がり、車に乗り込んだ
来るときとは全く違う…重い空気の中私は運転だけに集中した
少しでも佳奈のことを考えたら何もできない気がした
実家に帰るまで…私は必死に運転し続けた

第二十一話　天罰（後書き）

最後まで読んでいただいてありがとうございました。
できたら感想、評価のほうお願いします。

第二十二話　葬儀

ようやく私は実家についた
よたよたしながらうちに向かう…
私は涙があふれていた
ごめんね・・・
佳奈…ごめんね
私は棺桶の蓋をあけ、佳奈の顔を見た
青白い顔以外は行く前に寝ていた佳奈がそこにいた
私は佳奈の顔に自分の顔をつけた…
冷たくて…硬かった
いつものぷにゅっとした頬ではなかった
私は佳奈に布を被せ、閉じた
夫も佳奈がいなくなった日から私の実家にきて、佳奈を探してくれていたらしい
夫にも申し訳なかった
言葉もでなかった…
ただただ、涙があふれて止まらなかった
山で遭難したのだが、事故か事件かまだわからないらしい…
通夜も葬式も泣いてる間に次から次へ終わって行く…
佳奈は火葬され、骨になった
小さな骨…
まだまだ未来のあった佳奈…

佳奈の命を奪ったのは私だ
私はどうやって佳奈に償えばいい？
なにをしても佳奈はもう戻ってこない…
生きていない
私が自己嫌悪に陥ってなにもできない間、夫はみんなに挨拶しうち

に帰る準備をしていた
そんな夫に心から感謝していた
私が不倫していたなんてわかったら夫に殺されるかもしれない…
それでも構わない…
私はうちに帰る車の中で全て話した…

寂しかったこと…
孤独だったこと…
彼を好きになってしまったこと…
体の関係もあったこと…
旅行もその彼といったこと…
全てを話して楽になりたかった
自分が悪いんだって責めてもらいたかった
なのに夫は責めてこない…
「うすうす、わかっていた・・・俺に何が言える？」
「夕子を悲しませたのは俺だ
俺が浮気なんかしなかったら夕子も外をみたりしなかったはずだ
だからお前を責めたりしない…
夕子、もう一度二人でやり直そう…
六年一緒にいた時間、全てが無駄だったわけじゃないさ
俺が全部悪かった…
これからはうちの中のことも手伝うし、なるべく早く帰ってくるから
少しずつ…少しずつやり直そう
それが佳奈の願いじゃないか…？」
「そんな優しい言葉…今更かけないでよ…
もっと責めればいいじゃない…お前のせいで佳奈は死んだんだって…」
夫は何も話さなかった
私もうちに帰るまで何も言わなかった

話す気力もなくなっていた

第二十三話　異変

うちに帰るとなおさら佳奈がいない現実が突き刺さってきた
四月から小学校へいくはずだった佳奈…
佳奈の部屋には真新しいデスクとランドセルが佳奈の帰りを待っていた…
二度と戻ってこない佳奈…
私は心にやりを突き刺された気持ちで佳奈の部屋のドアを閉めた
うちの中にはあちこちに佳奈の存在があった
どの部屋にいっても佳奈のことが思い出された
こんなことになるくらいなら私は孤独にうちの中にいればよかった
夫に見捨てられ、浮気されても惨めな女でも…
佳奈を失うくらいなら私は我慢できたはずだ
それほど私の中で佳奈の存在は大きく、計り知れなかった
佳奈はこの小さな箱のなかで眠っている
私は何度佳奈に謝っても気が済むことはなかった
一日一日、過ぎていくのが長かった
その間、修二から時々メールがきたが返すことはなかった

もうすぐ初七日だ
私と夫は実家に帰る準備をしていた…
私が落ち着くまではと夫は毎日仕事を休んでいる…
たぶん結婚して以来初めてのことだった
皮肉にも佳奈が死んでしまったことで夫は私を労ってくれるようになった
もう少し前なら…家庭をやり直せたかと思うと後悔ばかりしてしまう
修二とはもう終わりにしよう
もう二度と会わない
それがせめてもの、佳奈への礼儀だと思った

実家に帰る前日の夜のことだった
知らない誰かからメールがきた

《佳奈は殺された…私が殺した…お前に天罰だ》

な…に…？
佳奈は事故死じゃなかった…？
嫌がらせ？
私は精神的に参ってるうえに怪文書まで送られて、気を失いそうだった
メールがただの嫌がらせでないことが添付されていた写真からわかった
佳奈を木に縛りつけている写真…
犯人以外には撮れないものだった
私はなんてメールを送ろうか悩んでいた
するとまたメールがきた

《まだわからないのか？明日佳奈が死んだ山にこい…
私の望みは金でも地位でもない…お前の絶望する顔がみたいだけだ…》

添付されていたのは動画だった…
犯人が佳奈の顔に雪を押し付けている…
佳奈は必死に逃げようともがいているのが写っていた

第二十三話　異変（後書き）

評価のほうお願いします。

第二十四話　殺人者

私は夫に相談しようかと思ったが、信じてもらえそうになかったので一人で山にいく決意をした
おそらく私に恨みがある人…心辺りはない
ないだけに恐かった
私に直接すればいいのに…
何故弱い佳奈を狙ったのか…許せない
絶対に許せなかった
私は警察に捕まってもいい…
佳奈を殺した犯人を刺すつもりで、ナイフをコートに入れた
私は実家につくとすぐ、山へ向かうことにした
またメールがきた
《一人でこい…でなければ真実は話せない》
私をどこからかみているかのように的確な時間にメールがきた
私はもちろん一人で行くつもりでいた
夫は母と法事の手伝いをしている
私はその隙に山へと車を走らせた
車で３０分とかからない
なぜ佳奈が一人で山へ向かったか…
一人でバスに乗るなんて不自然じゃないだろうか佳奈はまだ六歳…
どうして誰も疑わないのだろう…
不審者に連れていかれたんじゃないかって
私は車から降りて山に登始めた
もう暖かい日が続いているから雪は残っていない…
佳奈はこんなところで生き埋めにされて…
殺されて
自分のしたことも許せなかったが犯人はもっと許せなかった
私はひたすら山を上っていった

すると後ろから急に突き飛ばされた
痛っ…
私は木にぶつかって顔をすりむいた
後ろを振り返ると…美加がいる
（どうして美加がこんなところに？）
聞くまでもなく私は美加が犯人だと思った
立ち上がろうとする私を美加は蹴り上げた
「な…に…するのよ…」
私はお腹を押さえながらよろよろと木にもたれる
「美加が佳奈を殺したの…？」
「そうよ…あんたの代わりにね。男とスキーに行くのに佳奈が邪魔だったんでしょ…？お礼でも言ってほしいくらいなんだけど…」
「何いってるのよ…誰がそんなこと…」
「あんたの旦那から全て聞いたわよ。佳奈をあんたの実家に置いてくこともね…」
「どうやって佳奈を連れ出したの」
「簡単だったわよ…かなちゃん、お母さんがスキーしてるの、見に行こうかって話したら手を繋いでついてきたわ。」
「どうして…そんなむごいことを…」
「あら、今回は相当参ったようね…
旦那、寝とったときは何ともなかったのに」
「佳奈をどうして殺したのよ」私は語気を強めた
「まだわかんない？全部私から言わせたいわけ？まさか自分に非がないとか思ってるんじゃないでしょうね？」
私には全く心辺りはなかった
わからなかった

第二十四話　殺人者（後書き）

読んでいただいてありがとうございました

第二十五話　消せない過去

「話しなさいよ…全部」私は問い詰めた
「そう…わかんないの…そうよね…あなたは何の被害も受けてないんだもの…私と違って」
「何を言ってるの？」
「六年前のことよ…あんたが旦那と知り合ったコンパ…覚えてる？」
「それがどう関係あるのよ…」
「そのコンパのあと…
私達、一緒に帰ってたよね…それから男に追い掛けられて…」…思い出した
そうだった…
あの時たしか美加と一緒に帰ってて…
数人の男に追い掛けられた…
「思い出した？あんた自分だけ逃げたよね…」
あの時、二人で走って逃げたけど…
美加はこけて…男達に捕まったんだ
私は美加の叫び声を聞いて振り返ったけど
私一人じゃどうすることもできなかった

私は走って逃げたのだ
美加を置き去りにして…
「あんたは無事に帰ったから忘れてたんだろうけど…
私はあの日を忘れることなんでできなかった
あのあと私は男らに捕まって…
車に引きずりこまれて…四人に犯されたのよ…
四人よ…わかる？
絶対あんたにはわからない…この苦しみは…
そのせいで私の子宮は使いものにならなくなったのよ…

結婚したって子供も産めないのよ…
まあ男なんてまっぴらだけど」
「だから佳奈を殺したの？
恨むなら私を恨めばいいじゃない…
私を殺せばいいじゃない…
なんで佳奈なのよ…」
「あんたを殺したって意味ないじゃない…
私は自分の子宮を失い…体も汚されたのよ
あんたにも同じ苦しみを味あわせたかった
あんたも二度と戻ってこない、大切なものを思いながら一生過ごすの…
私はずっとずっとあんたを恨みながら生きてきた…
自分だけ幸せになろうなんて許さない…
これでやっと私の復讐は終わった…」美加はそういうと自分でナイフを突き刺して死んでしまった…
「これで佳奈は事故死のままね…
自分のしたことに後悔し続けて生きていけばいい…」
そう言い残して美加は倒れた
私はその場にしゃがみ込んだ…
もう立ち上がることができなかった

六年前のあの時は私も怖くて逃げるのに必死だった
美加のところへ戻る勇気なんてなかった…
戻れば私も何をされたかわからない
私の行動は正当防衛ではなかったのか
私も一緒にレイプされたら美加の気もすんだのだろうか…わからない
私が全て悪かったのだろうか

第二十五話　消せない過去（後書き）

最後まで読んでいただいてありがとうございました。できれば評価していただけるとうれしいです

第二十六話　祈り

「夕子。大丈夫か。」
夫に後ろから抱き抱えられ、私はふらふらと立ち上がる。
「もう…なにがなんだかわからない。私はどうすればよかったの？」
私は夫にもたれながら泣き崩れた。
「夕子…佳奈が待ってる…うちへ帰ろう」
「美加…」
「美加のことは警察に任せるんだ。警察も佳奈のことは事件を疑っていたんだ」
後ろをみると警察がたくさんいた。
救急車で美加が運ばれていく。
私も夫に連れられて車に乗り実家へ向かった。
そして、無事に法事がすんだ。
私は佳奈のお墓に手を合わせた。
（守れなくてごめんね…置いていってごめんね…佳奈の未来を奪ってしまってごめんね…
いくら謝っても許してもらえないだろうけど、
お母さん、頑張って生きていくよ）
（天国で佳奈に会えるように…
佳奈…ずっとお母さんのことみててね…
間違ったことしないように…
お母さん、もっと強くなるよ…
佳奈たくさんたくさんありがとう…
佳奈が産まれて来てくれてよかった…
いつも忘れないからね）
たくさんたくさん、祈りを込めて、手を合わせた
それから一週間、私と夫は実家で過ごし、自宅へ帰ることになった
私はまだ完全に立ち直れなかったが、普通に話せるようになってき

ていた
夫もそんな私の様子をみて、仕事に行く気になったようだった
まだ一人になるのは心細かった
でも、もう修二に頼ったりしない…
寄り掛かったりしない
夫にも佳奈にもそう誓ったのだ

第二十六話　祈り（後書き）

読んでいただいてありがとうございました

第二十七話　別離

私は修二に別れを告げるため最後に一度だけ連絡をとることにした
会って話すときっと修二の優しい声揺らいでしまう…
でもメールでは一方的すぎる気がした
電話ならちゃんと自分の声で伝えられる…
触れない距離で話しができる
私は夫が仕事にいってから修二に電話をかけた
「もしもし。夕子？」
「何度もメールくれていたのに、ごめんね。」
「佳奈ちゃんのこと新聞でみた…夕子絶対自分を追い詰めてるだろうと思って心配してた
電話くれたのは少し落ち着いた？気持ちの整理できた？」
「うん…もう大丈夫
沈んでいても佳奈が戻ってくるわけじゃないし、これからは前向きに生きていかなきゃって思ってるの」
「そっか…それなら安心した」
「修二と出逢えたこと、後悔してない
数カ月だったけど、ホントに幸せだった。今までありがとう…」「僕も夕子に出逢えてよかった…これで最後なのか…？」
「もう修二とは逢えない…佳奈と約束したから
夫とやり直す約束…だからこれでもう、連絡しないから…」
「わかった…夕子にはもう僕は必要ないんだね
ねえ、夕子…もしこんなことになってなかったら夕子は僕のそばにいてくれた？
旦那さんと別れるつもりだって話していたよね？」修二を愛していた…
でも、それは言えない
言ってはいけない

「もしも…なんてない
私の現実は佳奈が死んじゃったこと…
それしかないの
だからもしもの答はだせない」
「僕は夕子を愛している…今でもそれはわかっていて…僕はいつでも夕子からの電話待ってる
僕からは絶対にかけないから…夕子、もう一つだけ言ってもいいかな」
「うん…」修二の声が切ない…
早く電話を切らないとまた私の心が揺れてしまいそうだった
「佳奈ちゃんの為に旦那さんとやり直すんだよね…夕子の気持ちはどうなの？夕子の気持ちを隠してやり直しても佳奈ちゃん喜ばないんじゃないかな」
「今はそう…無理にかもしれない。だって今まであれだけ裏切られて、はい仲良くしましょう…なんてできるわけない
でもね、その前はホントに大好きだった…愛していた
佳奈が結婚する前にお腹にきたのも私達を結びつけるためだったのかもしれない
佳奈がお腹にこなかったら私達は結婚してなかったかもしれない
佳奈が産まれてきたことが私達が愛し合っていた証拠なんだと思うほんとに長い時間がかかるだろうけど夫とやり直したい…そう本心から思ってる
きっと私にもいけない所があったの
愛されるだけじゃなくて、自分から愛さなくちゃだめなんだってわかった
修二を愛したことでわかったの
愛し合って結婚したってお互いがお互いをずっと必要としなければ夫婦愛も家族愛も成り立たないんじゃないかな
お互いを必要とする引力があるから家庭が丸くなるんじゃないかな

そうじゃなかったからバラバラに崩れさったんだと思う
よく話しをすればよかったんじゃないかって…
今更なんだけど…」「僕のほうが年下みたいだな…夕子はやっぱり
しっかりしてるよ
ほんとに僕はもういなくて大丈夫だね
夕子…もう泣くなよ
かわいい顔が台なしだからな
旦那さんと仲良くなれること願ってる
でも…もし、どうしようもなくなったら必ず連絡してくれよ
僕は四月から金沢に戻るから…今まで楽しかった…ありがとな」電
話は切れた…

私は夫を裏切ることのないように修二のアドレスを削除した

これで佳奈を裏切らないですむ…と思った

第二十七話　別離（後書き）

あと少しで完結します。年内は無理かもしれませんが…。

第二十八話　揺るぎない決意

一週間後のことだった
携帯が鳴った…
誰からだろう…とみてみると修二からだった

《明後日の朝、金沢に戻る。あれからずっと夕子のことが忘れられないんだ…夕子、僕の傍にいてくれないか…ついてきてほしいんだ、金沢に…僕には夕子が必要なんだ…夕子の気持ちはこの前聞いて知っている…だけどもし、心変わりしていたら一緒にきてくれ…明後日9時、新大阪で待ってる…》
修二からのメールは正直いってうれしかった
そんなにも想ってくれていたなんて知らなかった…

あの時私を救ってくれたのは夫でも誰でもない…
修二だった
明後日、私は新大阪へ向かった
私は走ってホームへ向かう
椅子に座って俯いている修二がみえた
私は修二の傍に歩いていく
修二がふっと顔を上げた…
視線が合う…
修二は私のほうへ駆け寄ってきた
「夕子…逢いたかった…」と私をぎゅっと抱きしめる
私はその手をふりほどいた…
修二はわからないという顔をしている
「修二…私が一番苦しかった時、つらかった時傍にいてくれてありがとう…ありがとうって修二に会っていたかったの。この前、電話で伝えたのはあなたに会うときっとまだ揺らいでしまいそうな気

がしたから…」
「今日は…？一緒にきてくれないのか…？」
「ありがとうを伝えたかったの。もうあなたにあっても揺らいだりしない。最後までわがままな女でごめんね。修二の傍にいたらずっと愛してもらえたかもしれないのにね。さよなら…ほんとにありがとう」

修二は無言で電車に乗った…
私は握っていた手を離した…

さよなら…修二

もう二度と逢うことはないだろうけど、修二のことは忘れないよ
修二が傍にいてくれたから私は私でいることができたのだから
女としてみてもらえてうれしかった
でも私は修二の気持ちに私は甘えていたのかもしれない
甘えれば優しく抱きしめてくれる修二に酔っていた
そして私はその気持ちよさと引き換えに佳奈を失ってしまったのだ

それで私は目が覚めた
佳奈が教えてくれたんだ
これは愛じゃないと…
私が愛していたのは…
愛されたかったのは…

夫だった

夫に裏切られた私は自分の本当の気持ちを見失い修二の優しさに溺れていった
でも彼がいたから私は生きていけた

あの時もし出逢わなければ…
きっと今の私はいない…夫を許せた自分なんていないはずだ
だから彼には感謝している
彼に逢えてよかった…
こんな気持ちをもう一度味わえるなんて思ってもいなかった
私は修二との思い出を大切に心の隅にしまいこんだ
もう二度と夫を裏切ることがないように…

第二十八話　揺るぎない決意（後書き）

ようやく執筆ができました。ラスト一話で完結します。あともう少しお付き合いくださいね

第二十九話　もう一度…

その夜、私は夫に連絡をした
「今夜いつもの場所でごはん食べない？」
「あぁ前よくいったよなあ、わかった。7時、待ち合わせにしよう」

以前は夫が誘ってくれていた
私達は何度もその場所で愛を育んできた
喧嘩したら必ずこの場所にきて仲直りした
そういえば、佳奈が産まれてからはきてなかったな…夫とやり直すならやっぱりこの場所からがいい

「夕子。待ったか？」
「少しだけね。ここから見る景色は変わらないね」

「そうだな…俺あの時夕子しか見えてなかったのに…本当悪かった。ごめんな」

「いいよ…もう。私も同じことしたんだから。ねえ、もうお互い正直に話そう。あなたは由希さんと別れること…できるの？佳奈もいないし…いいのよ、もう。私に気を使わなくて。あなたの人生なんだから後悔しながら私と過ごすなんてしてほしくない。惨めになるだけだから」「俺は佳奈が死んでしまう前からあいつとは別れていた。っていうか…オレみたいなおっさんはやっぱタイプじゃなかったらしい。あっさり別の男とどっかいってしまったよ。だからお前とやり直すってことじゃなくて…。やっぱり俺には夕子しか無理なんだ。佳奈がさ…死んでしまったとき絵を描いていたんだよ」

「絵を？」

「そうさ…俺と夕子と佳奈と三人の絵を。佳奈が真ん中で…手を繋いで。”なかよしかぞく”って書いてあってさ…それみたら俺…今まで何してたんだろって…大切なもの無くしてからしかわからないなんて…最低だよな。俺…夕子に男に見られていない気がして…働いて給料持って帰ってくるだけかって思ってしまって。そんなときにあいつが俺が好きだとか言うから…俺ものめり込んでしまって…ホントに悪かった」夫がそんなことを思っていたなんて意外だったいつも自信たっぷりな夫からそんなことを聞くなんて…思いもよらなかった

結婚して不安を抱くのは男も女も関係ないのかもしれない

そう思った

「私も同じだったよ…もう一度二人でやり直せるかな…？」

「やり直せるさ…夕子、今日は記念に旨い店に連れて行ってやる」

と私の手を握って自分のポケットに入れて強引に歩き出す…

出逢ったころと同じだった

この強引さが好きだった

「淳志…歩くの早いよ…」

六年ぶりに夫のことを淳志と名前で呼んだ

淳志はびっくりして振り向いた

淳志は嬉しそうに笑っていた

ほんとに些細なことでひびも入るし、逆に仲直りもできてしまう…

夫婦とは不思議なものだ

二人の時計は再び動き出したもう止まることがないように、なくさないように進み続けた

二年後…二人に双子の赤ちゃんが授かり、淳志と夕子は子供が産まれても愛を失くすことはなかった

佳奈を忘れないように愛佳(あいか)、愛奈(あいな)と名付けた二人はもう三歳になっている…

夕子はもう二度とドラッグに手を出すことはなかった

夕子は幸福だった

第二十九話　もう一度…（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。麻薬ー溺れていく愛ー完結しました。みなさんのおかげで最後まで書くことができました。次の作品も書き始めていますので、よかったらみてくださいね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6992c/

麻薬ー溺れていく愛ー

2010年10月16日02時16分発行